

『狭衣物語』と薬師信仰： 法成寺薬師堂を基点として

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 倉田, 実 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/7002

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



『狭衣物語』と薬師信仰

——法成寺薬師堂を基点として——

倉 田 実

はじめに

浄土信仰が浸透した十一世紀後半の成立となる『狭衣物語』には、阿弥陀如来の西方極樂浄土、弥勒菩薩の兜率天内院、帝釈天の忉利天などの浄土信仰が語られている。西方極樂浄土への往生を願うのは嵯峨院と式部卿宮北の方（藤壺の母）、兜率天は狭衣と入道宮（女二宮）、忉利天は飛鳥井君であり、浄土はその格によって登場人物たちに振り分けられ、住み分けられている。^①

二一〇億もあるとされる浄土の、この他の代表的なものとしては、観世音菩薩の補陀落山、阿閼如来の東方善快浄土（歡喜国、無動国、金粟世界などとも）、薬師如来の東方瑠璃光浄土（東方浄瑠璃世界とも）などもあり、これらは平安文学に認められるが、^②『狭衣物語』には不在である。しかし、薬師如来については、『狭衣物語』には二度ほど語られているので、当時の仏教信仰、薬師信仰などを見通しながら、そのありようをここで確認しておくことにしたい。引用文献の出典は論末に示した。表記を一部私に換えた場合がある。

一 浄土信仰の多様性

平安時代の仏教信仰は、様々な寺院・經典・仏像がその対象になっていた。

・ 寺は 壺阪。笠置。法輪。靈山は、釈迦仏の御すみかなるがあらはれるなり。石山。粉河。志賀。〔『枕草子』一九五段〕

・ 経は 法華経さらなり。普賢十願。千手経。随求経。金剛般若。薬師経。仁王経の下卷。(同一九六段)

・ 仏は 如意輪。千手。すべて六観音。薬師仏。釈迦仏。弥勒。地藏。文殊。不動尊。普賢。(同一九七段)

右に例示された寺院・經典・仏像は、当時の人々に信仰されていた代表的なものになるう。これらの中から、どれか一つだけが個人の信仰対象になるといふことはなく、どれもがその人の状況に応じて信仰されていた。神も仏も信仰するので、仏の世界も多様に受容されていたのである。したがって、次の藤原道長のようなあり方も、憧憬されこそすれ、無節操とされることはなかった。

おほかたこのことのみかは、わが御寺、わが御殿の内にせさせたまふ事どもまねびつくすべきかなし。ある時は六観音を造らせたまひ、ある折は七仏薬師を造らせたまひ、ある時は八相成道をかかせたまふ。ある時は九体の阿弥陀仏を造らせたまふ。または十齋の仏を等身に造らせたまひ、ある時には百体の釈迦を造り、ある時は千手観音を造り、ある時は一万余の不動を造り、ある時は金泥の一切経を書き、供養せさせたまふ。ある時は同じく大威徳を書き、供養せさせたまふ。また、八万部の法華経を申し上げさせたまふ。これらみな、滅罪生善のためと思しめす。これに添へて、懺法の営みおこたらず。御堂の勤め、ひねもすよもすがらおこたらせたまはず。年月を経て、しつくさせたまふこと、仏の御事にあらずといふことなし。〔『栄花物語』第十五・「うたがひ」卷・一九八〜九頁〕

道長が「わが御寺」とする法成寺で「滅罪生善」のために行った造仏、仏画製作、写経の数々であり、六観音以降、数字を漸増させる仕方で説明されている。

六観音↓七仏薬師↓八相成道↓九体の阿弥陀仏↓十斎の仏↓百体の釈迦↓千手観音↓一万体の不動↓八万部の法華経
右のうち「八相成道」「二万体の不動」は仏画、「八万部の法華経」は写経、これ以外は、仏像である。「二万体の不動」が絵像になることは、次の記述で分かる。

今日於阿弥陀堂可レ被レ供レ養等身百体絵像不動尊、(『小右記』万寿四年(一〇二四)五月三日条)

法成寺阿弥陀堂供養の記事である。この「等身百体絵像不動尊」が誇張されて「一万体の不動」とされていよう。一つの御堂に「二万體」の仏像を安置するのは不可能だが、絵像なら可能である。

また、「百体の釈迦」に関しては、その数に史料による別がある。

・ 於法成寺中新造之百一体「中体丈六、今百体等身」尺迦如来、今日巳時奉レ移二新造堂一云々、(『小右記』万寿四年六月二十一日条)

・ 中尊はみな金色にて丈六にておはします。今九十九体は等身の仏にて、みな金色にぞおはします。(『栄花物語』第二十九・「玉の飾り」巻・一一八〜一〇頁)

丈六の中尊(中体)、その他の等身は同じだが、総数を『小右記』では百一体、『栄花物語』では百体にしている。ここは史料の近日性から『小右記』が妥当であろう。しかし、道長に即していえば、この一体の差は、何でもなかったことであろう。とにかく、思いつく仏像は、絵像を含めて、何でも造立・製作された次第を提示している。今日からすれば、無節操とも思える事象だが、これが当時の理想的な信仰の環境なのであった。

先の『栄花物語』「うたがひ」巻の語りで興味深いのは、薬師如来にかかわることが多いことである。六観音と七仏薬師は、共に薬師如来にかかわり、十斎の仏もその一つが薬師如来であった。次章では、この薬師如来像関係を見ていくこ

とにしたい。

二 法成寺薬師堂供養

薬師如来像を本尊とする仏堂の典型として、法成寺の薬師堂を挙げることができる。『栄花物語』には、万寿元年（一〇二四）六月二十六日に行われた供養の様子が詳細に語られている。長くなるが、その全体を引用する。ここに平安時代の最も荘嚴な薬師信仰のありようが見てとれる。

①はかなく過ぎて、六月にもなりぬれば、二十六日、かの薬師堂の供養、例の事どもえもいはずめでたし。御堂の御有様、例の目も輝きて、いかにも見分きがたし。大宮、殿の上とぞおはします。御局、この御堂の北の方によりて、廂にみな御簾懸けたり。

②御堂の造りざま、犬防のさまなど、西の御堂に異ならず。薬師仏の御前の方の母屋の柱には、十二大願の心を絵にかかせたまへり。六観音の御前の方の柱には、観音品の偈の心をみなかかせたまへり。飯室の阿闍梨の手をつくしたまへるほど、思ひやるべし。

③南より北ざまに七仏薬師ならばせたまへり。はしばしに日光、月光立ちたまへり。ひまひまに十二神将丈七尺ばかりにて、色々の衣を着、さまざまの顔、心々の気色にて、持たるものみなことごととなり。見るに、かつは笑ましう、かつは恐しげなり。

④一々に見たてまつりて、随願薬師経の文を思ひ出でたてまつる。「一聞我名、悪病除癒、乃至速証、無上菩提」とあり。一たび御名を聞きてかかり、況んや七仏を見たてまつらむほど、思ひやるべし。

⑤また七仏薬師経に曰く、「もしわが名を聞くことあらんもの、悪趣に墮ちば、仏の神力をもて、また名号を聞か

しめて、返りて人趣に生れて菩薩の行を修し、すみやかに円満することを得しめむ」とのたまへり。まいて、見たてまつるほどを思ふに、おろかならんやほ。

⑥また六観音は、六道のためにと思しめしたり。本誓を思ふにいとあはれなり。「大悲千手獄、大慈聖我鬼、師子馬頭畜、大光面修羅、天人准泥人、大梵如意天」とのたまへり。かく思ひつづけ拝みたてまつるにも、六道に輪廻することあらじと、頼もしくなりぬ。

⑦その中にも、如意輪の御思惟の気色もあはれに見えたまふ。「難断煩惱、即能断除、自然智慧、發起慈心、随類示現、以大慈悲」、また「難度衆生、能度相現、悲哀衆生、慈如一子」などのたまはせたるほど、おぼろげならずかし。

⑧ここのの仏の現れたまへる、かつは、いづこより来りたまへるにか知らまほしきに、無量義經の文に曰く、「戒定惠解知見生、三昧六通道品發、慈悲十力無畏起、衆生善業因縁出」とのたまへり、殿の御前の御心の中より現れたまへりと知りぬ。

⑨堂莊嚴、仏供など、さきざきのごとし。事ども果てぬれば、百余人の僧たち祿賜ひて、衆人ども例の作法にてまかでぬ。御堂供養の有様さきざきに異らず。

⑩この仏の御うしろ、東の方に、間ごとに戸をたてたり。仏の御うしろには、御格子を短やかにしわたして、紫の末濃の御帳にて、泥して絵かきて、村濃の紐したり。いみじうなまめかしう見えたり。(『栄花物語』第二十二・「鳥の舞」卷・四一〇～一頁)

やや細かく十段に分節して引用した。①はこの段の導入的な語りなので、②から見ていきたい。

法成寺において、阿弥陀堂と薬師堂がもつとも威容を誇った仏堂であった。②に「西の御堂」とあるのが阿弥陀堂で、薬師堂はそれと異なることはないとされている。これは經典に由来すると思われる。

又西方極樂世界の如く、功德莊嚴等しくして差別無し。(『薬師琉璃光如来本願功德経』)

薬師琉璃光如来の浄土は、西方極樂世界と同じであり、区別はないと明示されている。薬師如来と阿弥陀如来、東方瑠璃光浄土と西方極樂浄土は、一對であるかのように理解されていることになる。だから法成寺でも、「西の御堂に異らず」との語りが入るのであろう。

この薬師堂の柱には、「十二大願の心」「観音品の偈の心」が「飯室の阿闍梨」によって描かれていた。「十二大願」とは、衆生済度のために薬師如来が菩薩であった時に立てた十二の大願のことで、その内容は、次節で触れることにしたい。「観音品の偈の心」は『法華経』観世音菩薩普門品にある偈(詩句形式で仏徳や教理を述べたもの)のことで、それぞれの趣旨が絵画化されたのである。

絵師となる飯室の阿闍梨は、藤原伊尹の孫、義懐の息男で、延円(縁円)阿闍梨(?～一〇四〇)のことである。「絵阿闍梨」(『大鏡』伊尹伝・『富家語』二三五)、「造第(阿)闍梨」(『小右記』治安三年(一〇二三)十月二十九日条)などとも呼ばれ、高陽院造作にもかかわらず「石を立つること相伝を得たる人」(『作庭記』^③)でもあった。当代一の総合芸術家ということになろう。法成寺の柱絵にかかわって、堂の莊嚴に寄与したのである。

③が薬師堂を莊嚴する仏たちである。ここを実資は簡潔に示していた。

廿六日、壬午、今日法成寺薬師堂供養「丈六七仏薬師如来・日光・月光・十二神将・丈六六観音像等安置堂中」、(『小右記』万寿元年(一〇二四)六月二十六日条)

七体からなる「七仏薬師如来」が薬師堂本尊、「日光、月光」は脇侍となる菩薩である。③に「はしばしに日光、月光立ちたまへり」とあるのは、七仏薬師それぞれに日光・月光の脇侍があったということであろう。「十二神将」は眷属で、薬師如来の十二の大願に応じて、『薬師経』を読誦する者を守護する十二の夜叉大将になる。諸仏の化身とされ、十二刻に配されたり、十二支の動物と結びつけられたりする。これらの中で、一番注意深く見られている。この諸仏の他に「六

観音」も安置されているが、「七仏薬師如来」と共に後に扱いたい。

④の「随願薬師経」は、『薬師琉璃光如来本願功德経』や『薬師如来本願経』などの異名になる。「一聞我名」以下が薬師如来の第七の大願の引用で、その御名を聞くだけでも功德になるのに、実際に御仏を拝見申し上げた時の功德を想像すべきであるとしている。ただし、引用されているのは『薬師琉璃光如来本願功德経』の経文と相違しているが、この本文は他も見られる。

本願薬師経

一聞我名、悪病除愈、乃至速証、無上菩提

ひとたびも聞くには御名ぞたもたる思ひわづらふ我が名なれども（『発心和歌集』二二二）

大斎院選子内親王の歌集であり、詞書は『栄花物語』と同じである。こうした本文が流通していたのかもしれない。諸仏を拝見して、經典に思いをはせた体裁である。

⑤は「七仏薬師経」に關してである。これは、『薬師琉璃光七仏本願功德経』になるが、引用されているのは、『薬師琉璃光如来本願功德経』の意識である。ここも本文に異同があるが、これについては割愛し、七仏薬師について触れておきたい。

七仏薬師は、善名称吉祥王如来・宝月智嚴光音自在王如来・金色宝光妙行成就如来・無憂最勝吉祥如来・法海雷音如来・法海勝慧遊戲神通如来・薬師琉璃光如来の総称となる。このうち前六仏を薬師如来の異名あるいは同体とする説と、それぞれ別の仏とする説がある。ここでは、「七仏薬師」と総称するので、異名説で考えていきたい。いずれも薬師如来なので、「はしはしに日光、月光立ちたまへり」となる。法成寺薬師堂では、これらが造立されたのであり、『小右記』治安三年（一〇二三）十二月二十三日条によれば、仏師定朝がかかわっていた。

七仏薬師を祈る修法は、十二の大願の第七に基づき、除病延寿や安産、あるいは除災を目的として行われている。仏像

ではなく、絵像で行う場合もあった。

於「清涼殿」、修「七仏薬師法」、画「七仏像」、懸「御簾前」、(『続日本後紀』嘉祥三年(八五〇)三月十九日条)
 右は七仏薬師法の早い時期のもので、算賀においては、次のような用例もある。

黄金の薬師仏、五尺にて七ところ、経など、さらにせらるなり。(『うつほ物語』「菊の宴」巻・三五頁)

嵯峨院太后の六十賀の準備についての大宮の発言の一部である。薬師仏があつて「七ところ」とされるので、これも七仏薬師と考えられている。この法は九世紀に円仁がはじめ、十世紀中頃には天台宗の良源が、撰閑家の安産祈願をしてから特に有名になったとされている。『うつほ物語』の例からすると、安産祈願だけでなく、算賀での除病延寿も七仏薬師法で願われたのである。この点は次章でも扱うことになる。なお、中世王朝物語の『海人の刈藻』巻四や『石清水物語』では、出産に際しての七仏薬師法のことか語られている。

⑥が六観音のことで、六道にそれぞれ配されて衆生済度に当たるとされている。それを説明的に示すのが、「大悲千手獄、大慈聖我鬼、師子馬頭畜、大光面修羅、天人准泥人、大梵如意天」になる。これは「大悲千手獄」の場合、大悲、観音は千手、観音のことで六道の地獄道に配されるという示し方になる。以下、「大慈聖我鬼」は「大慈観音は聖観音で餓鬼道」、「師子馬頭畜」は「師子無畏観音は馬頭観音で畜生道」、「大光面修羅」は「大光普照観音は十一面観音で修羅道」、「天人准泥人」は「天人丈夫観音は准胝観音で人道」、「大梵如意天」は「大梵深遠観音は如意輪観音で天道」ということになる。六観音を拝見すれば、六道廻廻から救済されるであろうとするのである。法成寺薬師堂の場合が、最も早い六観音の事例とされている。

⑦は六観音のうちから如意輪観音の「御思惟の気色」を取り上げたものになる。ここに引用される経文の出典は未詳である。

⑧は、薬師堂の多くの仏たちが出現した所以を問うている。『法華経』の開経とされる『無量義経』徳行品の法身出現

の条件を示す偈から「衆生善業因縁出（仏の法身は衆生の善業を因縁として生ず）」という理解を得て、「殿の御前の御心の中より」法身が出現したのだとしている。道長の道心を讚美したのである。

⑨は法要の終了を言い、⑩は①を受けるかのように堂の室礼を言うことで一段を閉じている。

以上、法成寺薬師堂供養の様子を見てみた。この薬師堂は、史上最も豪壮であったと思われる。仏たちが蟬集する様子は、さぞかし壯観であったであろう。こうした薬師堂で薬師如来の本願「十二大願」を念じて道長の無病息災が念じられたのである。この「十二大願」については多様に解釈できるので、他の具体的な功德と共に次節で確認していきたい。

三 薬師如来の功德

薬師如来の功德は、「十二大願」によって説明されている。簡単に整理すると次のようになろうか。

第一、衆生を薬師如来のごとくにする、第二、迷いの衆生に悟らせる、第三、衆生の欲するものを得させる、第四、衆生を大乘に安立させる、第五、三聚戒さんじゅかいを備えさせる、第六、障害ある者に諸器官を完具させる、第七、衆生の病を除く、第八、転女成男てんにょじょうなんさせる、第九、正しい見解を備えさせる、第十、獄にある衆生を解脱させる、第十一、飢渴した衆生に飲食物を与え心安らかにさせる、第十二、衣服に事欠く衆生に上妙の衣を得させ満足させる、右からも類推できるように、人々の病患を救い、悟りに導くことだけが本願ではなかった。七仏薬師法による功德は前章で見たが、これ以外の具体的な功德も、一部位のように示されていた。

衆求する所に随い、一切皆遂げ、長寿を求むれば長寿を得、富饒を求むれば富饒を得、官位を求むれば官位を得、男女を求むれば男女を得ん。（『薬師琉璃光如来本願功德経』）

ここの言葉を換えれば、(1)長寿延命、(2)致富、(3)昇進、(4)婚姻などの願いも叶えることになる。(1)

は「十二大願」の第七と重なるが、ずれる側面もある。これらの薬師如来にかかわる功德は、物語や説話に語られている。それぞれ事例を確認していきたい。

(1)長寿延命

長寿を求める場合、寿命経だけでなく、薬師経の書写でも叶えられた。『今昔物語集』巻六「震旦張李通書写薬師経命語第四十七」では、寿命は三十一歳を越えられないと占われた李通が、薬師経一卷を書写したところ、今度は三十年命が延びたという話になっている。

算賀で薬師仏が供養されて、延命が祈願される場合もある。

神無月に、対の上、院の御賀に、嗟峨野の御堂にて薬師仏供養じたまつりたまふ。いかめしき事は、切に諫め申したまへば、忍びやかにと思しおきてたり。仏、経箱、帙寶のととのへ、まことの極楽思ひやらる。最勝王経、金剛

般若、寿命経など、いとゆたけき御祈りなり。(『源氏物語』「若菜上」巻・九二―三)

光源氏四十賀に際して、紫上が「薬師仏供養」をすることである。これと併せて「最勝王経、金剛般若、寿命経」も修されている。

造像や写経などが、延命祈願の法会として行なわれると、これは統命法ぞくみょうほうになる。聖武天皇不予に際して行われたのが最初の記録になろうか。

また、薬師仏像七軀、高さ六尺三寸なるを造り、并せて経七卷を写さしむ。(『続日本紀』天平十七年九月二十日条)「薬師仏像七軀」とあるので七仏薬師法になろう。造像と写経で聖武天皇の延命を祈願したのである。統命法については、次章でさらに触れたい。

また、一度死んだ者が薬師仏によって蘇生し、寿命が延びたという話もある。『今昔物語集』巻六「震旦溜洲司馬、造薬師仏得活語第二十一」では、遺族たちが「薬師ノ像ヲ七体(七仏薬師になる)」を造って供養したために蘇生したとい

う話になっている。蘇生の話は、同第二十四にもある。長寿延命はやはり薬師如来の中心的な功德なのである。

(2) 致富

貧しい者が薬師如来によって富むという話である。『今昔物語集』巻四「天竺貧人、得富貴語第三十八」には、「薬師ノ靈験ノ寺」で懺悔したところ夢告があり、その指示に従って富を得たとする話がある。また、同巻六「震旦貧女、錢供養薬師像得富語第二十二」では、わずかにあった「一文の錢」を薬師仏に供養したところ、妻を亡くした富める人が薬師仏の夢告によって求婚してきて、女は躊躇するも結婚して豊かになったという話になっている。致富と婚姻が同時に叶えられたのである。

(3) 昇進

官位昇進と結びつく話は、少ない。『三宝絵』中（仏教全書二五三頁）には、丹後国の竹影重通が、『法華経』八部を書写し、薬師仏ほか諸仏を造り、その報にて唐土第二の大臣になったという話がある。また、『更級日記』で菅原孝標女が太秦広隆寺の仏に祈願することが記されていて、この仏は薬師仏で父の任官を念じたとする説⁴がある。その可能性はあるかもしれない。

(4) 婚姻

婚姻が叶った話は、先に見た。この他では『撰集抄』巻八「第二十五伊勢広隆寺ノ歌ノ事」に、零落した伊勢が太秦広隆寺に籠り、「南無薬師あはれみたまへ世の中にありわづらふも同じ病ぞ」と詠んだところ、結婚の夢告があり、石清水八幡宮の検校と結婚して幸せになったとする話がある。歌の趣向は、「世の中にありわづらふ」、すなわち良き配偶者がいずに苦しむのも病だというのである。だから薬師仏が功德を施したことになる。なお、『伊勢集』⁵からすると、この零落伝説は信じがたく、この歌も伊勢作ではあるまい。

こうした薬師如来の功德のほかに、浄土思想とかわる功德もあった。極楽遣送である。『薬師瑠璃光如来本願功德経』

には、西方極樂世界への往生を願う者は、命終の時に薬師瑠璃光如来の名号を聞けば、八菩薩が来て行く道を示し、極樂世界の蓮華の中に化生するであろうと記されている。薬師如来は、八菩薩に極樂遣送を託したのである。このことは、『栄花物語』第十七・「音楽」巻に、治安二年（一〇二二）七月十四日の法成寺金堂供養の際に記されている。これらの点については別稿^⑥を用意したので、そちらを参照されたい。さらに功德はあるが、以上にとどめておきたい。

四 『狭衣物語』の薬師の法

ここから『狭衣物語』に移る。薬師如来は、八菩薩に極樂遣送を託したという教えによって、東方瑠璃光浄土への往生は念じられないということになろう。だから、西方極樂浄土、兜率天、忉利天という浄土が『狭衣物語』で語られても、東方瑠璃光浄土のことは不在であったと思われる。しかし、薬師如来自体は、二度ほど登場している。ここでは一例目を見ることにしたい。出家を決意した狭衣が斎院（源氏宮）のもとに訪れた段である。出家の意向を匂わした狭衣に、源氏宮は返す言葉も見つからないので歌で応えるところである。

いかにもいらへ聞こえさせたまふべきやうもなければ、

言はずともわが心にもかからずや絆ばかりに思はましかば

わざとなう言ひ消たせたまへる、げに、薬師の法行はずとも、四十九日ありても生き返りぬべくおぼさるる。

「誰によりてかは、かかる心もつきそめはべりし。」

行きかへりただひたみちに惑ひつつ身は中空になりねとやさは（『狭衣物語』巻三・一七八頁）

源氏宮は、「口に出して言わなくても、お兄様のことが私の心にかからないはずがありませんか。私を絆なりと思つてくださるなら、出家するなどおっしゃらないでください」と歌に詠んでいる。源氏宮は控えめに狭衣の出家をいさめ

たのである。これは久しぶりの歌による会話となり、狭衣に源氏宮に対する恋着を意識させるのである。それが、「薬師の法行はずとも、四十九日ありても生き返りぬべくおぼさるる」になる。亡くなって四十九日が過ぎて、「薬師の法」がなされなくても蘇生するような気持ちがあると思うのである。

この「薬師の法」が蘇生を願う続命法であり、その方法は次のように説かれている。

昼夜六時に彼の世尊薬師瑠璃光如来を礼拝し供養し、此の経を読誦すること四十九遍、四十九の燈を然し、彼の如来の形像七軀を造りて一一の像前に各七燈を置き、一一の燈量は大いなること車輪の如く、乃至四十九日、光明をして絶やさざれ。五色の彩幡を造るには長さ四十九搽たくしゅ手なれ。応に雑類の衆生を放ちて四十九に至るべし。（『薬師瑠璃光如来本願功德経』）

続命法は、七仏薬師を造像して、昼夜六回四十九遍の薬師経の読経、四十九日間の四十九の燃燈、四十九搽手の長さの造幡作成、放生する生き物四十九になるようにすると説かれている。このうち「光明をして絶やさざれ」は原典「光明不絶」であり、これは巻四で引用されることになる。続命法は、かなりの費用がかかる、富んだ者にしかできない法であったが、經典にはそのこだわりは見られない。とにかく臨終間近や、絶命した時に蘇生を願うためには、遺族・眷属たちに、こうした続命法が求められたのである。

狭衣が「四十九日ありても生き返りぬべくおぼさるる」と思った「四十九日」は、経文に頻出する四十九に惹かれたものである。四十九日過ぎたら蘇生できないとは記されていない。ただし四十九日間の四十九の燃燈から、四十九日が蘇生の限界と誤ったのであろう。また、ここで自身の死を言っているのは、あるいは恋死を想定しているのかもしれない。源氏宮の声を聞いたので、自分が恋死したとしても、「薬師の法」なしで蘇生するであろうと思ったのである。

この箇所を、新全集は「まことに死出の山路も越えやるまじう、薬師の法は行はずとも、四十九日の中に返さまほしく思しなさるる」の本文で、次のような頭注を施している。

狭衣は、自分の靈魂を現世に呼び戻して、蘇生したいと思ったのである。狭衣自身の願望として、「返りなまほしうぞ」とする本が多い。底本の本文の形では、修法させて返させたいという、使役の意が入るか。出家と死去とが混同されている嫌いもあるが、死後のことは比喩的な例示であろう。（新全集『狭衣物語』卷三・一九七頁頭注一三）

新全集は、「薬師の法」をしてもらわなくても、自分の意志で蘇生したいと思ったと理解してしよう。これに対して集成は、「よしんば死後四十九日のあとであろうと蘇生するにちがいないと思われるほどである」と傍注している。この本文は、「薬師の法」は行わなくても、自分の意志とは関係なく蘇生してしまうであろうと、やや客観視した表現になっていよう。絶命しても蘇生したいとするのはおかしい理屈であり、ここは本来、集成のように理解すべきであろう。源氏宮への恋着によって恋死したとしても、「薬師の法」なしで蘇生してしまうであろうと判断したのである。狭衣の恋着の強さが、七仏薬師の続命法によって語られているのである。

五 『狭衣物語』の十齋の仏たち

もう一カ所、薬師仏が登場するのは、母を亡くした宮の姫君（後の藤壺）が悲しみに沈む段である。

せちに恋しくおぼえたまふ夕暮に、「もしもや慰む」と、うつくしう心ことに作り置きたてまつりたまひて、常に向ひたまひつつ行ひたまひし十齋の仏たち見たてまつりたまふにも、「薬師には、ただ御事をのみ申す」と、常に言ひ知らせたまひしを思し出づるに、甘露、法薬の薬も今は何にすべき身にもあらぬを、「ただおはしにけむかたへ送りたまへかし。さばかりのことは難くしもあらじ。光明不絶とかやのたまへる誓ひぞかなひがたかりける」など、人知れずおぼしづく。

夢さむる暁かたを待ちし間に四十九日にもやや過ぎにけり

など思し続けらるる、日数もあさましくて、袖を顔に押しあてて泣きたまふ。(『狭衣物語』巻四・二六七〜八頁)

宮の姫君がいるのは、故父式部卿宮が建立し、母が死去した「亀山のいかめしき寺」(巻四・二四三頁)である。この寺は、「九体の阿弥陀おはする御堂」があるほか、「いと大きな堂ともあまた」ある浄土寺院であった。式部卿宮が九体阿弥陀堂を建立し、姫君母の北の方は、自ら造らせた「十齋の仏たち」を安置する別の御堂をしつらえたのであろう。法成寺には十齋堂もあり、寛仁四年(一〇二〇)閏十二月二十七日に供養が行われた。旧稿⁷では九体阿弥陀堂から「亀山のいかめしき寺」は法成寺の面影があるとしたが、「十齋の仏たち」が十齋堂に安置されているとすれば、ここからも法成寺との関連が指摘できることになる。

この「十齋の仏たち」に対して、新全集は底本「十さい」を「十体の仏達」にし、「前出に「九体の阿弥陀おはする御堂」とあることから、薬師と九体の阿弥陀像を合わせて十体の仏達であると考えられる」としている。しかし、御堂は幾つもあり、九体阿弥陀堂としても、薬師三尊となるので十二体の仏たちとなろう。ここは「十齋の仏たち」でいいのであり、その意味の「十体の仏達」にするならば同じことになる。

「十齋の仏たち」は、『拾芥抄』によって説明されるのが定番になっている。すなわち、毎月齋戒を保つことに定められた十日間にそれぞれ配当された十体の仏のことである。一日は定光仏、八日は薬師仏、一四日は賢劫千仏、十五日は阿弥陀仏、十八日は地藏菩薩、二十三日は勢至菩薩、二十四日は観世音菩薩、二十八日は毘盧遮那仏、二十九日は薬王菩薩、三十日は釈迦牟尼仏となっている。それらの日に配当された仏菩薩を念ずると、悪疾災厄を逃れ、福德長寿を得るとされていた。

姫君は、母が恋しくなると悲しみを慰めるために、生前に「うつくしう心ことに作り置き」「常に向ひたまひつつ行ひたまひし十齋の仏たち」を拝見している。母は、生前「薬師には、ただ御事をのみ申す」と言っていて、毎月八日には薬師仏を拝し、姫君の息災や、よき婚姻を念じていたことになる。

このことを思うと、姫君は「甘露、法薬の薬も今は何にすべき身」でもないと思息している。「甘露」は蜜のように甘い諸神・諸仏の常用する飲み物で、飲むと不老不死になるとされている。「法薬の薬」は、新全集が説くように、『薬師本誓集』の「諸々の衆生の為に法薬を授与し、一たび名号を聞かば、衆病悉く除く。貧窮多苦は速疾に消滅し心身安楽となる」に応じた薬師如来の持つ薬になる。薬師如来は左手に薬壺を持つので、そこに入っているイメージであろう。姫君は不老不死、衆病悉除は、今の自分には必要なく、それよりも母のもとに送ってほしいと念じるのである。

死んで亡き母のもとに行きたいとするのは、延命・蘇生が自分と無関係になるので、「光明不絶とかやのたまへる誓ひぞかなひがたかりける」との思いを強くしている。これは前章に引用したように『薬師瑠璃光如来本願功德経』の続命法の一節であった。薬師如来の十二の大願ではないので、「誓ひ」とするのはおかしいが、死を思う時、おのずと七仏薬師法に想到するということなのであろう。『狭衣物語』の薬師仏は、東方浄瑠璃浄土の教主としての面よりも、「薬師の法(続命法)」や「八斎仏」ということで作品に位置したのである。

おわりに

薬師信仰のありようを『栄花物語』に語られる法成寺薬師堂供養の段で確認し、『狭衣物語』における薬師如来について検討してみた。薬師信仰を「治病・延命・産育」等の現世利益を中心とするとの理解⁽²⁾では済まされない問題があったと言えよう。法成寺薬師堂一つとってみても検討の余地はあり、薬師如来の功德の多様性も理解する必要がある。『狭衣物語』においては、浄土思想とかかわる阿弥陀仏、弥勒菩薩、帝釈天とはちがって、もっぱら続命法とかかわる薬師如来のありようが語られていた。極楽遣送という薬師如来の本願は、『狭衣物語』に不在なのである。本稿はやや素描に終始したが、この点だけ深められたことでひとまず擱筆としたい。

注

- (1) 拙著『庭園思想と平安文学―寝殿造から』（花鳥社、二〇一八・一一）の第2章『狭衣物語』の浄土寺院と浄土庭園―道長の法成寺と頼通の平等院の影―、拙稿『狭衣物語』と『源氏物語』―その時代相を中心として―（『狭衣物語の新世界』武蔵野書院、二〇一九・二）。
 - (2) 阿闍如来の東方善快浄土のことは、『今昔物語集』卷六第二十五に語られている。
 - (3) 注（1）の前者。
 - (4) 小内一明「とうしんにやくしほとけをつくりて」（群馬県立女子大学国文学研究）8、一九八八・三三
 - (5) 秋山虔・小町谷照彦・倉田実『伊勢集全注釈』（角川書店、二〇一六・一一）参照のこと。
 - (6) 拙稿『更級日記』の薬師仏と阿弥陀仏―「東方浄瑠璃浄土の西門」を出て「西方極楽世界の東門」に入る―（仮題『更級日記』上洛の記千年（武蔵野書院、二〇二〇・四予定）
 - (7) 注（1）の前者。
 - (8) 五来重「薬師信仰総論」（『薬師信仰』民衆宗教史叢書、雄山閣、一九八六・一一）
- 出典 『栄花物語』『大鏡』『枕草子』『うつほ物語』『源氏物語』は新編日本古典文学全集、『今昔物語集』『富家語』『続日本紀』は新日本古典文学大系、『狭衣物語』は新潮日本古典集成を主として新編日本古典文学全集も参照、『撰集抄』は岩波文庫、『作庭記』は日本思想大系、『発心和歌集』は『新編国歌大観』、『小右記』は大日本古記録、『薬師瑠璃光如来本願功德経』は石田瑞磨『民衆経典』（仏教経典選、筑摩書房、一九八六・六）、『続日本後紀』は新訂増補国史大系、『三宝絵』は日本仏教全書によった。